

郷土史への扉

今年には明治維新から百五十年の節目の年です。今回から二回に分けて、横川町上ノにある山ヶ野金山と明治維新との関わりについて紹介します。

藩と維新を助けた金脈

山ヶ野金山は江戸時代初期から昭和二十八年まで約三百年にわたり操業された、日本で三本の指に入る金山です。金の総採掘量は八十トに上り、最盛期には二万人が山に集まりました。周囲には役所や商店、屋敷が並び、大変な賑わいを見せていました。

金山の発見は、川内川の支流（現在のさつま町佐志）で農夫が金鉱石を発見

したのが始まりとされています。宮之城の領主であった島津久通はすぐに第二代藩主・島津光久に報告し、金山の探索に当たりました。

その結果、寛永十七（一六四〇）年三月に金塊を発見。その金塊は「あたかも赤牛の伏せたるが如く（赤牛が寝そべっているような形であった）」と伝えられています。金の採掘は順調に進み、幕府の許可が出てから三年間で約二十六トもの金を産出。あまりの多さに薩摩藩の国力強化を警戒した幕府は、採掘の停止を命じました。

採掘中止から十三年後の明暦二（一六五六）年、採掘は再び許され、幕末までの二百一十年間で二十五トを産出しました。採れた金による年間収入は、幕末期で三万六千両ほどに上り、奄美の砂糖の二十三万両に次ぐ収入源となります。この財源は、財政難に苦しむ薩摩藩を大きく助けたばかりでなく、明治維新を成し遂げる大きな原動力に

明治維新と霧島

明治維新と山ヶ野金山

その⑤



山ヶ野製錬所（尚古集成館所蔵）



トロッコ導入前の西浜坑口（尚古集成館所蔵）

開発を支えた西洋技術

もなりました。

薩摩藩が金山開発に成功した理由の一つに、西洋とのパイプがあったことが挙げられます。当初は順調に進んだ採掘や金の製錬も、江戸時代後期に採掘場所が地中深部に及ぶと旧来の工法では効率が低く、金の産出量は減少します。そこで第十二代藩主・忠義は慶応三（一八六七）年、フランス人の鉱山技師・ジャン・フランソワ・コアニエを招き西洋の技術を取り入れます。

※蒸気搗鋳機や水車搗鋳機を導入し、レンガ造りの製錬所を設置。※水銀混汞法（水銀アマルガム法）と併せて金の製錬効率を上げました。ちなみに、現在の製錬所跡には当時の建物の基礎部分とレンガ片が残っています。

明治十（一八七七）年には、フランス人のペー・オジェを招きます。旧坑

道を測量し直し、新たにトロッコの導入や数カ所ある坑道の連結、排水・通風の整備などを行いました。さらに鉱脈の掘削に火薬（発破）を用いるなど、作業効率を向上させました。ほかにも、蒸気機関運用のために石炭を運搬する道路や水車用の井堰を整備するなど、多岐にわたる指導を行いました。

なお、ペー・オジェの給金は、月額七百円でした。明治政府高官の西郷隆盛らが月額五百円であったことを考えると、海外の技術を高く評価し、期待していたことが伺えます。

次回は山ヶ野金山と五代龍作（五代友厚の娘婿）・西郷菊次郎（西郷隆盛の長子）との関わりについて紹介します。

（文責 鈴）

※1 金鉱石を粉碎する機械。

※2 水銀を用いて金銀を製錬する方法。

※3 明治初期の1円は現在の約三万円。